慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	伊東岱吉君の批評に答へる
Sub Title	
Author	気賀, 健三
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1948
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.41, No.8 (1948. 8) ,p.475(47)- 483(55)
JaLC DOI	10.14991/001.19480801-0047
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19480801-0047

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

る。勿論二百餘頁の本書でかゝる問題の充分な論述を求める方が元來無理であるとは思ふ。著者の今後の展開を期待する次第である。著者の立場や見解についての誤解や理解不充分は多々あることゝ思う。從來多く見かける御座なりの儀禮的書評ではなく、讀後感じたるまゝを卒直に記すことが學問發展への道であると思ふので非禮をもかへり見ず妄言をつらねた次第である。

本書がマルクス＝レーニズムへの批判を主題としているものであるから、書評は自ら、この批判への疑問、特に本書の批判對象とされたマルクス＝レーニズムの立場から生ずると想像される問題點を中心とするものとなつた。從つて著者の民主主義に關する積極的主張が、同種著述中に占める地位や、その從來の見解よりの一歩前進の意義等についてはふれるところがなかつたことをお詫びせねばならぬ。私もまたマルクスやレーニンのものを充分理解しているものではない。從つてまたこの批評も頗る獨斷と無理解の多いものであらうと思ふ。從つて、著者に對する獨斷とマルクシズムに對する獨斷との二重の罪を犯しているのではないかとおそれる。この點を御容赦乞ふ。

「附記」本稿は昨夏執筆されたものである。豫定では更に、一　マルクシズムと民主主義（特にブルジョア・デモクラシーとプロレタリア・デモクラシー及び人民民主主義の問題）二　戰後の民主主義の現實的問題を取扱ひ、最後に本書の民主主義の積極的基本見解について述べるつもりであつた。ところが私が昨秋來長期病臥したゝめ中斷せざるを得ず、約束の期限から一年を經過した上に書評の性質上餘りに延引してはどうかと思ひ、舊稿のまゝ掲載することとした。この點も併せて容赦を乞ふ。（一九四八・七・一〇）

伊東岱吉君の批評に答へる

氣賀健三

私の小著が刊行されてから、部分的な批判や感想は方々から與へられ、教へられる所も多かつたが、今度畏友伊東君が總體的に丁寧な批評を與へてくれたので、こゝに同君の好意に對して深く感謝すると共に、私の考へ方をもつと明かにし、又前著の不備を補ふ機會を得たことを喜ぶ、たゞ紙數の都合のため十分な解答にならないことを同君の好意に對して濟まなく思ふ。

伊東君の綜括的な批判としては、私のマルクス、レーニンの文獻研究が不十分、不用意であること、理解が淺く一面的でかつ部分的に止まつてゐることをいはれたが、之に對しては反撥する言葉もない。私は決してこれらの人やそのエピゴーネンの本を十分澤山といはれる程讀んでゐないので、そういふ非難は甘んじて受けなければならぬ。それは今後の勉強を重ねて同君のみならず讀者の叱責に答へるつもりである。それは伊東君自身が批評論文の最後に記した自分自身の反省の言葉と同一であらう。もつとも伊東君の場合には謙遜の辭かもしれないが、私のは謙遜でも何でもない。全く私の不勉強を省みての告白である。

併しそれはそれとして私は伊東君の具體的な批評には答へるだけの責任は果さなければならぬ。

最初に私の立つてゐる近代合理主義の立場、又は功利主義や新カント的觀念論の立場について、すでにマルクシズムがその歴史的背景や現實的基礎について批評してゐるのに、それに答へないで、無批判的にそれを自分の正しい立場として置いてゐることを非難される。文化價値とか理性とか論理的妥當性といふやうな抽象的な概念をあたかも先驗的に無批判的にもつてくるその立場自體がまず反省されることを要するといはれる。

こゝで私が反問したいことがある。存在が意識を規定する。精神の物質的基礎が認められなければならぬ、イデオロギーの現實的基礎が明かにされなければならぬといふ唯物的意見を私は知らないわけではないが、同時に、論理は論理として客觀的妥當性を持たなければならぬことを、私はどうしても主張せざるを得ない。平易なことであるが私が伊東君と議論するのも、議論によつて是非を決しようとし、相互に不合理な矛盾を指摘し反省することにあるのであらう。それには兩方ともに眞理は眞理として、誤りは誤りとして事實の判斷ができることを前提としなければならぬ。それにはお互に共通の論理があり間違ひは間違ひだといふことが判らなくてはならぬ。お互ひが判りうる――具體的に知識の不足のために知らないことがあるのは仕方がないが――ここが前提になる。私と伊東君の存在がどんなにちがはうと、私が觀念論者で、伊東君が唯物論者であらうと、とにかく、どちらかにまたは兩方にまちがひがあることが判るといふために必要な論理が共通にわからなければ、議論する意味がない。そしてお互に相手のいふことを理解したり、自分の說が正しいと思つたりする能力は卽ちお互ひの合理的思惟の能力卽ち理性である。理性の具體的內容がどんな歴史的產物であらうと、相互に理解しうること、そして現實を說明する正しさが相互に納得させることによつて相手に主張しうるのだといふことは判りきつたことではないかと思ふ。

唯物史觀でもマルクス經濟學でも歴史的產物で、歴史的限定を蒙つてゐるが、その正しさは、異つた環境で育つて來た日本人にも外國人にも妥當すると考へるのだらう。そして現在をも過去をも將來をも說明することができると思つてゐるのだらう。それともマルクス主義の正しさはどこかのプロレタリアだけにしかわからないといふのであるか。さうではないだらう。伊東君が自分の理性で判斷して正しいと思ふのであらう。

私が近代合理主義思想の根本的精神と考へる理性的精神、伊東君の觀念論的解釋、なるものは、それの歴史的背景や現實的基礎の如何にかゝはらず正しいものがあると思ふ。古代のプラトンの思想でもアリストテレスの思想でも正しいものは正しい、誤りは誤りである。それには人間が理性的動物で、お互に理解しうる能力と共通の論理があることを同時的な條件とするのである。そういふ意味で私は理性を持ち出し論理の世界を考へるのである。そして私は自分の本で、唯物史觀についても、民主主義論についても、そういふ共通に理解しうるといふ論理と理性の地盤を以て批評したつもりなのである。一つのイデオロギーの歴史的由來や現實的基礎を說明しただけで、その是非の判斷は下せない。眞僞は一つの說がいかによく現實を說明しうるか、又その說の內部に論理的矛盾がないかどうかできまると私がいふのは、こういふ意味である。問題は論理の矛盾にあるのではなくて、事實の矛盾にあるとしか私には考へられない。

レーニンは客觀的眞理の實在性とそれへの無限の接近を認めてゐることについては私も一通りの理解をもつてゐるが、私はそのことゝ科學の黨派性との辨證法的統一といふことがどうも納得できない。マルクス主義といふ黨派的學問がブルジョワ科學より正しいといふ證明は黨派性にあるのでなく、さき程のべた眞僞の基準で證明されなくてはならないと思ふ。そこで實踐の問題になるが――たしかに私はこのことを本の中であまり述べなかつた不注意を自覺してゐる――實踐によつて眞僞を定めるといふ考へ方は、論理的にどうしても判らないことはやつてみるより外はない

といふ意味でのみ承認できる。それは科學の貧困を證明することに外ならない。二度と同じことを繰返へすことのできない歴史社會で眞僞の判定者としての實踐を强調するのは、ドグマの逃口上である。元來われ〳〵の學問の實用的價値は、正しい知識と正しい判斷力を養つて、人間に正しい實踐の仕方を敎へることにあるのではないか。事實の判斷の世界ばかりでなく、實際の行動の世界においても、こういふ狀況ではこうするのが正しいと考へて自分の實踐を定めるのが理性的な人間の態度ではないか。無反省に又は狂信的に行動する人もゐるが、――その爲に社會はなかなか合理的に推移しない――伊東君自身はどうであらう。

行爲の基準としての正しいものとは卽ち根本には倫理的理念があるわけである。それは具體的世界において具體的な處方箋を下だすものであるが、その處方箋が倫理的理念の全部ではない。具體的なものは歴史的環境で色々な形をとるが、その形の根本には、これこそが正しい、階級の如何を問はず、存在のいかんを問はず妥當すべき正しいものがあるといふ合理的確信がなくてはならない。歴史的現象形態にとらはれて、根本の精神を求めようとしない考へ方をする非科學的態こそ反省を要する。伊東君がマルクス主義を是とすると共に社會主義運動や革命を禮讃するのも、それが自分の理性と良心を納得させるばかりでなく、他の考への人間はすべてまちがつて考へ不正な行爲をしてゐると思ふのではないか。

自分の實踐は正不正の問題でなく、事實の問題だなどといつては、勝手にしろとしかいへないのではないだらうか。お互ひに惡口をいひあつてけんかをしてゐるのでは人間の社會は善くならない。善くなるかならないかではない、必然的な發展があるんだといふなら、私はなぜ必然に從つて行動しなければならないんだといひたい。必然とはむしろ個々の行動の產物ではないか。マルクスはプロレタリア解放を叫ぶ人道主義の選士だと解したり、搾取のない正義の行はれる社會變革を考へる理想主義を中にもつてゐるなどゝいふ解釋は、私は唯物史觀の矛盾の曝露に外ならないと思ふ。

私は伊東君の一般的な批判に對する解答に長い頁をとりすぎたが、兩者の間の見解の相違の根本はそこにあると考へたからで、後は同君の懇切な批評にもかゝはらず略說させて貰ふ。

第一は生產力と生產關係の矛盾を私が單に階級鬪爭としてのみ理解したといふことである。之はたしかに私の不用意であつた。しかしそれには論據がある。唯物史觀の立場を徹すれば、生產力と生產關係との間の矛盾は常に在るのだといふ。それならば、生產關係は常に社會における人と人との間の關係であり、そこに矛盾が反映するであらう。兩者の矛盾は必然的に、生產力を發達させるものと、生產關係を維持するものとの間に利害の對立を生じ、私有財產を繞る階級對立ではないにしても、やはり別種の階級的對立を惹起するのではないか。さういふものがなくなつてしまふことは物質的矛盾が人と人との間の關係に現はれないことを意味し唯物辨證法的發展が歴史の中途で止つてしまふ結論を生むのである。伊東君はそういふ矛盾が共產主義社會では、人々の意識的統制を超越した矛盾ではなくて、人間意思による統制下に漸次除去し得る性質のものといつてゐるが、私にはその具體的意味が判らない。伊東君はとに何の社會的規定のない人間をもつてきてゐるが、それでよいのか。階級社會では人間は矛盾に操られて動物の如く爭ふが社會主義社會では一致協力して矛盾をなくすことができるといふ伊東君の推論は私には納得致しかねる。

原始的な氏族關係の共產社會において發展した生產力はやはりその生產關係を矛盾するに至つて後者の崩潰をきたしたのではないか。そしてその矛盾は古い階級と新らしく富を家族的に蓄積し始めた階級、奴隷制度を生產力の發達のために利益とするに至つた階級との矛盾となつて現はれたといふのが、エンゲルスの「家族・私有財產及び國家の起源」の說明の一つではないか。「古い、階級なき氏族社會の土臺下を掘つて之を覆へす」「卑劣極まる手段――盜

み壓迫、詐欺、裏切――」を用ひたのは、その社會の中に發生した新らしい階級でなくて何であらう。エンゲルスは之をくやしがつて、イロクオイ人達がたゞ自然に對してその能力の範圍内で生産者として生産物を支配してゐたといふ、いはゞ搾取を知らぬ時代を追想し、「今日可能なる自由聯合の基礎の上に、人類による偉大なる自然支配」のこの狀態をとり戻すことを次の時代の使命だといふのである。之は牧歌的なあこがれのやうに感ぜられる。

次に國家の死滅について、一國社會主義の段階では對外的に國家が必要だが、世界が共産主義になれば、國家は死滅するんだといふ伊東君の豫言はいかにもマルクス的であつて反對しない。しかしそれはいつの世に實現されるかあてにならないし、かりに近くそういふ世界が來るとしたら、たゞ一つの獨裁者と何人かの政治局員の構成する世界支配の國家が殘ることは確實だらうと思ふ。それは階級支配の國家ではなくなるかもしれないが、自稱指導者支配の國家となるにちがひない。それがきつと人間意思を統制する國家であらう。

階級分化の問題については、之一つの階級の基本的對立のみをとり出して他の階級分化を無視するマルクス主義者の現實歪曲を指摘したのである。偶然と必然に關するエンゲルスの言葉は之には當てはまらない。伊東君がこゝでいはうとしてゐるのは偶然的なものと本質的なものとの區別であらう。この時の偶然の意味は、必然と對立させた場合の偶然の意味とはちがふと思ふ。私はこの二つの階級の對立が資本主義社會で基本的に重要な特徴をなしてゐることを認めるのにためらはないけれども、それだけで一切を割切るマルクス主義者の解釋を現實歪曲と解するのである。マルクス主義者の態度は階級分化の複雜さと多樣さの中から必然的なものを把み出さうとしてゐないが、逆に必然的なものをきめておいて、その後で現代階級の分化、複雜化を整理しようとしてゐる。それこそ社會科學の放棄である。辨證法的發展といふ魔術的な言葉に溺れてゐる伊東君の反省を期待する。

資本主義の將來に關するマルクスの豫言をレーニンが補つたのは、前者の歴史的限界を後者が正しく發展させたのであつて豫言は誤つてゐないといふ說に對しても私は異義をもつ。資本主義の成熟が一定程度の發展といふことに置きかへられてゐるし、成熟した國には、いかに殖民地の犧牲があるとはいへ、豫言が適中してもよささうなものである。ロシアの實狀や西歐資本主義國の實狀は豫言から遠いものであると思ふ。マルクスの豫測しなかつた變化はずべてジグザグのコースだとか偶然性として片附けてしまふ樂觀論に安んじてゐる信仰には私は返へす言葉もない。

ロシアの場合には可能性（內的必然性）を現實性に轉化せしめる正しい理論が實踐を導いたので歴史の必然法則が貫徹したが、ドイツの場合には誤つた理論が實踐を導いたので歴史は必然法則を貫徹しなかつたといふ。ロシアには正しい歴史があり、ドイツには間違つた歴史があるといふのであらうか。イデオロギーのこういふ偉力を認めることは唯物史觀に叛いてゐないであらうか。マルクス主義にいはせれば、ドイツがあゝなつたのも日本がこうなつたのも歴史の必然ではないのか。この立場からは、むしろ歴史を人間の表面の意識で理解しないで、背後の起動力で解釋するはずではないか。

最後に民主主義論について一言しよう。私の立場が一時代前にマルクスの清算したブルジョワ思想だといふ批評については、すでに最初に說明したからこゝでは反覆を止めよう。民主主義にどんな內容をも盛らうと、勝手である。言葉は符號なのだから。だが我こそは眞の民主主義だといつてそれをブルジョワ民主主義に對して誘り、優越性を自慢する以上、その內容を明かにして比較してみることが必要ではないか。そして彼等のもつてゐる價値觀念に照らしてそのいふところ、その行ふところと矛盾がないかどうかを檢討する必要がある。私はそれを說いたのである。併し黨派的偏見に捉はれた伊東君の意見は初めからてんでそういふ論證の仕方を問題にしないから私のいふことは少しも

理解されてゐない。たゞもう「歴史的現實的基礎」にたよつて歴史的相對主義の立場を繰返へすのみである。私の考へ方はブルジョワイデオロギーだときめつけることで是非の問題がきまつてしまふといふ態度では議論にならない。冒頭の議論をくりかへすことになるが、伊東君が現在プロレタリアイデオロギーが正しいと認識してゐるのは、同君自身の社會的存在が決定したのでなく、君の思惟の能力と經驗に對する判斷から、正しいと確信してゐるからではないか。總ての思想が社會的産物であることは明かなことであつて、そうでない思想などといふものはあり得ない。併しそういふことと、思想の正しさは論理的にも倫理的にも別箇に判斷さるべきものではないか、こういふとすぐにそれは思惟と存在をバラバラに切りはなす觀念論的二元論だといふかもしれないが、私と君とが議論して正邪を爭ふのは悪口をいひあふためでなく、自分の認識が正しいことを納得させようとするからであらう。それが可能であるためには、共通の理解能力、思惟法則があることを豫定してゐる。私がこの小論を書くのもそのためである。それには階級的黨派性にとらはれない理解力がお互ひにあることを豫定してゐるのである。

そこで伊東君が末尾に附してゐる數々の疑問にはかう答へるより外はない。

一、近代合理主義精神及び功利主義の現實的基礎如何、私は現代の普通の人間がもつてゐる理性的能力に期待するとだけ答へておく。人のいふことを理解し、自分の考へを相手に理解させる能力、さういふ理性の働きに私は民主主義的な社會進歩の可能性を期待する。さういう理性のかけてゐる人間の社會では民主主義は通用しない。問答無用といふ人間には民主主義は役に立たぬ。話せばわかるといふ人間を私は相手にしてゐるし、又話せばわかるといふ人間の養成が社會の進歩に最も大切なことであると思つてゐる。それには倫理的説教だけでよいなどゝは決して考へてゐないことは一言附加へておく。なほ功利主義の立場については、私は最近批判的に變つてきたことを申し添へてもらふ。それについてはすでに本誌に發表した論文で一端を洩らした。併し伊東君のいふ觀念論であることに變りはない。

二、階級的對立は一致しなくてもよい。たゞ對立に伴ふ悪を見るなら、それを除去する方法について民主主義的一致さへあればよい。質的な差でも、歩一歩、一年々々順次に解決することが可能である。可能といふのは、上にあげた、話せばわかる人間が多くなればなるほどます〳〵プロバブルになる。といふことである。自分の意思は暴力や脅迫を用ひても押し通し、相手をかまわぬ式の人間が多くてはだめである。それでも少しでもいゝから暴力を避ける方法に努力すべきだと思ふ。伊東君は自然成長的に政治革命が行へるか意識的に行はるべきかを問ふてゐるが、この言葉の意味がわからない。カウツキー式かレーニン式かといふ意味なら、もちろん前者式であるべきだと思ふ。併し改革は意識なしに行へるものではない。ことに話せば判る人間が多くなり、自然現象についても社會現象についても、人間の理解が深まれば深まるほど、人間の行動は計畫的になり、期待と結果との一致する改革が可能になる。その意味ならもちろんます〳〵意識的に行ふのである。

三、私が經濟的自由主義を現在否定して計畫經濟の方向をとるといふことが唯物史觀の否定と矛盾するだらうといふ伊東君の推測は的はづれである。社會の經濟構造が變れば、變ることを認め、變化の理由をつきとめ又それに對する處方箋をかへるのは唯物論者の占賣ではないであらう。

四の問ひには、お答へ致しかねる。部分的には色々な雜誌や本に書いたから、どうかそれを讀んでいたゞきたい。

伊東君は實に遠慮なしに私の本を批評してくれたので、私も無遠慮に書きたいことを書いてしまつた。筆が滑りはしなかつたかをおそれるが、同君の平素の友誼を憶ひ、論爭上の非禮を恕してくれることゝ思ふ。